

役に立つ、 役に立たない



長谷川 修司

しばらく前に、教員養成や人文社会科学系学部の縮小・廃止、そして社会的要請の高い分野への組織転換を求める通達が文部科学省から各大学にだされたことがあった。これが大きな話題となり、マスコミでも多く取り上げられた。

サミュエルソンの経済学ではなく簿記会計を、憲法学でなく宅建法を、シェークスピアでなく地域の名所旧跡を外国人観光客に説明できる英語力を大学で学ばせるべきだという意見には一定の説得力があった。しかし、一般教養の切り捨て、人文社会科学軽視、代わりに科学技術重視こそ国際的な流れだという論旨に批判が噴出した。「文系＝役に立たないもの」、「理工系＝役に立って国の繁栄を支えるもの」という単純な図式に対して、教育における文系と理工系のアンバランスが国を滅ぼすといった大げさな批判までこのとき展開された。文系 vs. 理工系という対立構図から始まり、実学教育 vs. 教養教育、グローバル教育 vs. ローカル教育など、大学教育に関して多面的な議論が繰り広げられたのである。

しかしながら、理学部物理学科という理工系のど真ん中で禄を食む身として、このような議論にずっと違和感を覚えていた。なぜなら、上記の議論でいう「理工系」が、あまりに狭い意味でしか捉えられていないと感じていたからである。文系学部の重要性を強調するために、「科学技術だけではわれわれは精神のバランスを保つことはできない」、「目に見える実益のみを重視する『事実』の教育だけでなく、『想像』も人間や人間社会にとって不可欠である」、「思慮ある言語表現を核とした教養教育」こそ

重要（読売新聞 2015 年 5 月 15 日）、といった議論が繰り広げられたが、そのような言説の裏には、理工系学部での教育・研究は、豊かな人間性や想像力を育むとか感受性の涵養とかにはまったく関係ない“非人間的”なもの、という先入観が前提とされているような気がする。化学反応を試験管のなかで起こしたり、方程式を解くことに熱中したり、遠い宇宙の果てにあるブラックホールを観測したりといった行為からでは学生たちの人間性を涵養するなど想像できないので、“非人間的”な印象しかもたれないのは、ある程度は仕方のないことであろう。しかし、このような理工系に対する先入観はまったくの見当違いである。

30 年近く物理学関連の研究者としてやってきて、そして大学で学生たちを指導してきた経験からすると、理工系の教育と研究であっても、豊かな想像力と精神性、しなやかでたくましい人間力を身につけることができる。逆に、理工系で博士号を取得するには、自分の専門分野の知識やスキルを学んだだけでは不十分で、答えの見えない課題にチャレンジして自ら道を切り拓いていく人間力と高い倫理観が必須なのである。

研究に必要な情報をかき集め、自分なりに咀嚼し、指導者や先輩からの支援を受けたり共同研究者とうまくコミュニケーションを取ったり、ときには目標を断念する苦渋の決断をしたり戦術変更を余儀なくされたりして、自分が使える限られた研究リソースや制約のなかで妥当な着地点を想像しながら研究を進めていく。数かずの困難を乗り越えて研究を進めることで得られるものは、単に専門分野での業績だけでなく、どんな知的職業にも役立つ「人間力」であるはずだ。大学の理工系学部は文系学部と同じ意味で「役に立って」おり、「文系＝精神・想像力」、「理工系＝事実・実益」という単純な構図ではないのである。

はせがわ・しゅうじ ● 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻教授。1960 年栃木県生まれ。1985 年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了、理学博士(1991 年)。<研究テーマ>表面物理学。